

スルース

2008(平成20)年2月18日鑑賞〈GAGA 試写室〉

★★★★



監督・製作＝ケネス・ブラナー／脚本＝ハロルド・ピントー／原作＝アンソニー・シェーファー／出演＝マイケル・ケイン／ジュード・ロウ（ハビネット配給／2007年アメリカ映画／89分）

第1章

アクションからコメディまで

……久しぶりに、上質でスリリングな2人劇に遭遇！ 対決するのは、功成り名を遂げた初老の探偵小説家と、「俺はあんたの妻の愛人だ」と名乗り、妻との離婚を迫るイケメン男。保険金詐欺（？）の提案を軸として展開される心理劇は実に面白い。弁護士の大量増員時代の今、レベルダウン気味（？）の新人弁護士の研修に最適だが……。



スルースとは……？

この映画も、タイトルを見ただけでは何の映画かサッパリわからない。またスルースが英語だとわかって、そのスペルを正確に書ける人は少ないはず……？ スルースとは「sleuth」、つまり「探偵」のこと。なぜ、この映画にそんなタイトルが……？

それは、2人の男しか登場しないこの映画の一方の主人公が、探偵小説をたくさん書き、そのすべてがベストセラーとなっている人気探偵小説家アンドリュー・ワイク（マイケル・ケイン）だから……？ たしかにそのとおり。しかしもう1つの理由は、アンソニー・シェーファー原作の舞台劇を映画化したこの作品は、第1幕、第2幕、第3幕とスリリングな男同士の探偵ごっこ（探偵ゲーム？）が展開されるため……？

そんなことをいろいろ考えながら、まずはこの映画のタイトルの意味をしっかりとみしめよう……。



シェイクスピアの超大作から、「2人劇」まで

この映画を監督したのは、『ハムレット』（96年）や『魔笛』（06年）等の監督としても、また、『相続人』（97年）や『ワイルド・ワイルド・ウェスト』（99年）等に出

演じた俳優としても、よく知られている英国演劇と映画界における重鎮ケネス・ブラナー。

彼が初監督、主演し、アカデミー賞監督賞、主演男優賞にノミネートされた『ヘンリー五世』（89年）を私は観ていないが、アカデミー賞3部門にノミネートされた『ハムレット』を観ただけで、彼のすごい才能を実感させられたもの。そんなケネス・ブラナー監督が、シェイクスピアのような超大作ではなく密室(?)における「2人劇」に挑戦したと聞いて、イチロー顔負けの守備範囲の広さにビックリ！

マイケル・ケインは、昔ティンドル役、今ワイク役

旧版でアンドリュー・ワイク役を演じたのは、私もよく知っているイギリスの名優ローレンス・オリヴィエ。他方、ケネス・ブラナー監督の新版でマイロ・ティンドル役を演じたジュード・ロウは、私もよく知っている若手のイケメン俳優。つまり、旧版のワイク役と新版のティンドル役は俳優が変わっているわけだ。ところが、旧版のティンドル役と新版のワイク役を同じ俳優が演じていると知ってビックリ。それがマイケル・ケイン。つまりマイケル・ケインは、旧版ではティンドル役を、新版ではワイク役を演じているわけだ。

そこで思い出したのが、1月29日に観た『夜顔』（06年）。カトリーヌ・ドヌーヴが主演し、第28回ベネチア国際映画祭金獅子賞を受賞した『昼顔』（67年）の38年後を描いた続編ともいうべき作品が『夜顔』。『夜顔』では女優はカトリーヌ・ドヌーヴからビュル・オジエに変更されたが、セヴリーヌの秘密を握る男アンリを演じたのは、『昼顔』と同じミシェル・ピコリだった。つまり、『夜顔』のアンリ役を42歳の時に演じたミシェル・ピコリが、81歳となった今、『夜顔』のアンリを再度演じたわけだ。

これもすごいが、1972年から35年ぶりに新版が製作された『スルース』で、マイケル・ケインが、若い時に演じたティンドル役から今度は初老の探偵小説家のワイク役を演ずるのも、そりゃすごいもの。私はこれまでマイケル・ケインという渋い俳優の名前と顔が一致しなかったが、これを契機にきちんとインプットしなければ……。

2人の男は、何をめぐって対決……？

前置き(?)が長くなったが、ロンドン郊外にあるワイクの大邸宅を訪問した(?)のは、超イケメン男のティンドル(ジュード・ロウ)。来客を監視カメラでじっ

と迫うというのはあまり良い趣味とは思えないが、それは探偵小説家のワイクなればこそ……？ また、ティンドルが何のために訪問したのかロクに聞かないまま、さかんに館内を案内し自慢話ばかりするのもあまり良い趣味とは思えないが、これがワイクの人柄……？

他方、笑みを絶やさずワイクの話を拝聴しながらも、早く本題に入りたいと多少焦り気味(?)なのがティンドル。ティンドルが今回ワイク邸を訪れ、ワイクに迫ろうとした本題は、「なぜあなたは奥さんと離婚しないのか？」と問い詰め、ワイクに妻マギーとの離婚を同意してもらうため。つまり、マギーの浮気相手であるティンドルが自ら夫のワイクと対決して離婚を迫ろうというのだから、こちらもかなり厚かましい……？

アンソニー・シェーファーの原作が1971年にトニー賞を受賞し、1972年に映画化されたのは、何とんでもこの2人の男の知性的な会話とスリリングな対決によるもの。つまり、「俺の妻によくも手を出してくれたナ」というよくある形のくだらない対決ではなく、実によく練られた展開となっていくところがミソ。勢い込んで「なぜ離婚しないのか？」と迫ろうとするティンドルに対して、ワイクは「実は私も妻と別れたいんだ」と意外な告白を。しかし一方で、「マギーは金のかかる女だ」「君にはそんな贅沢な妻を満足させることはできない」とボロクソ。そんなやりとりの中、第1ラウンドではワイクがティンドルに対してある「取引」を提案したが……。

第1ラウンドはワイクの勝ち……？

ワイクの提案は、ひと言で言えば、①金庫の中にある100万ポンドのネックレスをティンドルが盗む、②ティンドルはこれを闇ルートで売り、無税で80万ポンドを手に入れる、③ワイクは100万ポンドの保険金を手に入れる、というもの。また、それによってワイクはマギーと別れることができ、ティンドルは欲しいマギーを手に入れることができるから、すべて万々歳という計画だ。

この映画が面白いのは、イギリスの名優2人の丁々発止のやりとり、というより騙し合い……？ 最近は急速に増員されてきた新人弁護士のための研修がさかんだが、通り一遍の講義を聴くよりも、こんな映画を観て2人のやりとりをどう感じ、どう読むか、そんな感性を磨いた方がよっぽど有意義だと私は思っている。そんな面白いやりとりは直接観てもらわなければ意味がないので、ここでの紹介は一切省略。

ところで、ティンドルがワイクのこの提案に乗ったのは当然だろうが、果たしてその結末は……？ それをみると、明らかに第1ラウンドはワイクの勝ち！

第2ラウンドは……？

映画化されるとより多くの人が楽しむことができるが、アンソニー・シェーファーの原作はもともと演劇として楽しむために書かれたもの。したがって、第1ラウンド（第1幕）である結末を迎え、観客が「し～ん」となったところで幕が下りることに……。

続く第2幕は、書斎のテレビで自分の作品を映像化したテレビドラマを見ながらくつろいでいるワイクを不意に訪れてきたブラック刑事とのやりとり。不精髭をたくわえ、今でいうメタボ風の腹をしたこの刑事は、3日前に姿を消した男の行方を捜しているとのこと。つまり、「マイロ・ティンドルという男が、あんたに会いに行く、と言いついて姿を消した」というわけだ。

普通、刑事はコンビで行動するものだから、いきなり1人で乗り込んでくること自体少しヘンだが、そんなブラック刑事の追及は厳しくかつ執拗。しかも、「金曜日の午後6時半に来てくれ」というワイク自身が書いたメモを提示されたから、ワイクはティンドルの来訪を認めざるをえないことに……。さらにブラック刑事の尋問は、銃弾の痕跡、血の痕跡の追及から、ティンドルの服一式の追及にまで及び、最後にはワイクを羽交い締めにしながらか、「さあ、死体はどこへやった！」と迫ることに。こりゃ、かなり違法捜査だが、さて、これに対するワイクの返答は……？

ここまでは、ギリギリセーフの線として紹介しておこう。こんな息づまるシーンが展開される第2ラウンドは、その後意外な展開をみせていくから要注意！

第3ラウンドは……

第1ラウンドがワイクの勝ちなら、第2ラウンドはティンドルの勝ちにしなければバランスが悪い。したがって、原作者のアンソニー・シェーファーはきっとそんなストーリーを描いたはず……？

すると、決着がつくのは第3ラウンド。誰でもそう思うはずだが、さて、89分という比較的短い映画の中で第3ラウンドはあるのだろうか……？ もしあるとすれば、その展開は……？ そしてその勝者は……？

新版を観ると、旧版にも興味が

原作者のアンソニー・シェーファーが自ら脚本を書いて『スルース』をはじめて映画化、公開したのは、1972年とのこと。この映画のプレスシートには2つの興味深いエッセイがある。その1つは、大森さわか氏の「危険なオーラを放つふたりの英国男優、マイケル・ケインとジュード・ロウが見せるマインドゲーム」。もう1つは、喜志哲雄氏の「新版『スルース』のハロルド・ピンター」。

前者が面白いのは、女性の視点から「第3ゲーム」における2人の男の「老いと若さの対決に加え、男同士のセクシャリティの境界線上に踏み込む」状況を分析していること。そして後者が面白いのは、同じ題材を扱っていても、「二本のシナリオの根底にある言語観、劇や映画の言葉についての考え方は、ほとんど正反対のものだと言っている」との指摘。すなわち、「古い方のシナリオについて印象的なのは、饒舌さと機智だ」そうだ。

この2つのエッセイを読めばそれぞれ「なるほど」と思えてくるが、ホントに納得するためには旧版を実際に観なければダメ。新版を観て、さらにこんなエッセイを読めば、当然旧版にも興味が……。

2008(平成20)年2月19日記